

ヒキニート「島巡り？」

宇佐美大和

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

タイトルの通り。以前某所で書いていたSSを小説化してみようと思います。

初めて読んでくれる方へ

注意事項。ポケモンが普通に喋ります。また主人公は大して強くないしヒキニートです。もとのSSは決して調べないように。

もとのSSを知っている方へ

どうも久しぶりです。テトラポットです。BBSを引退するわけじゃあないですがちよつとこつちでも書いてみようかと思えます。

注意事項。トレーナー、ポケモンの名前、展開などが変わっています。安価くれた方

ごめんね。

もとのSSは決して調べないように。

実はだいぶ見切り発車です。ストーリーはできてるので、空いた時間にどんどん書いていけたらなと思っています。

目次

ヒキニート「島巡り？」	1
研究所に遅刻して御三家を逃した奴が貰 うポケモンなんて決まっている	8

ヒキニート「島巡り?」

「だから、ぼくは警察官になりたいです!」

10年くらい経った今でも、はつきり覚えている記憶がある。

授業参観か何かの、自分の夢を発表する会だったはずだ。あの時間は雨が上がった直後で、雲間からの光が不思議な差し込み方をしていたのを覚えている。

前の発表が終わり、その少年は壇上にかかる。

この時の窓からの光の当たり具合を、

時計の針の配置を、

少年の持った原稿用紙の汚れを、

何故か、鮮明に頭に、刻み込まれている。

「12番、オミナ。僕の夢は——」

* * *

——ゆつくりと、足を踏み出す。

壁の隙間からそつと相手を見ると、まだこつちには気づいてない。チャンス！

再装填^{リロード}、そして突撃^{アタック}！

相手がこつちに気づいた、構えようとする銃が火を吹くまでの、一瞬の勝負だ。撃ちまくれ！

「うおおおおお——！！」

……がむしやらに撃ちまくった、ハズだったんだが。

「おい！　こんなにラグるのおかしいだろ！　チートだこいつ、滅べチータアアア——！！」

「オーちゃんうるさいツツ!」

「うっせエババア!」

「何その言い方! 昨日からずっとゲームしかしてないじゃないの! やめないとWi

-Fi切るからね!」

「チツ……わーったよ」

渋々ゲーム機を置いて、凝った背中と目元をほぐす。いい加減このゲームにも飽きてきた。なにしろ煽りとチートが多い。とりあえず熱くなつたゲーム機を窓際の風に当てようと立ち上がると、壁掛けのカレンダーと目が合った。

既に2、3ヶ月めくつていないカレンダーの日付け、つまり2、3ヶ月昔の日付けに、「Happy Birthday☆」とペンで書かれている。

ああ、そういえば——このゲーム、この20の誕生日に貰ったんだっけか。

隙があるので自分語りをしよう。

俺はまあ、この様子を見ればお察したが、ヒキニートというやつだ。20を過ぎて家に閉じこもり、ゲームとネットサーフィンばかりしている。ヒキニートデビューは確

か、10歳とかそこら——リアルが辛くなって、ログアウトした次第である。

お袋は俺ババアに働いてほしがっているが（当たり前だ）、俺は家から出る気は一切ない。ここにいた方が幸せだからだ。一度きりの人生なんだから、辛い思いはあんましたくないわけだ。

とまあ、1時間前の俺はそう思っていた。

『無職の若者を応援しよう！島巡り費用応援宝くじ！』

このいかにもな胡散臭いキャンペーンのせいで、俺の平穩は崩壊させられようとしているのだった……

* * *

さつきのこと。

「オーちゃん？ 開けるからね」

「あー？」

お袋が一週間ぶりに要塞の扉を開けた。何の用だ？

「大事な話だから、よく聞きなさいね。宝くじが当たったの」

「ほーん、で俺にはなんかくれんの？」

「オーちゃんには50万円全額あげる。だから……」

「おつマジ!! よっしゃ、ちょうど課金したかったところで」

「だからよく聞きなさいって言ってるでしょ! いい、確かにオーちゃんには50万円あげる。でも、その代わり」

「あなたには、島巡りに出てもらいます」

「——は?」

* * *

島巡りとは何か——という問いには、「ググレ」と答えるのが一番効率的だ。そうだな……アローラ民としての見解を言わせてもらおうと、良く言えば微笑ましい子供の伝統行

事、悪く言えば子供の自尊心を叩き折りがねない悪習。つてところか。

ちなみに俺は出ていない。島巡りに出るのは基本11歳。当時の俺はすでにネットゲに興じていたからだ。

だから、世間の子供が体験するポケモンとの絆やら、熱いバトルやらは一切経験していない。ポケモンすら引きこもってからはまともに触れていないのだ。

それに、出ろ、と。いきなり。

「いや、まず何？ その島流し流刑絶縁宝くじって」

「島巡り費用応援宝くじね。20歳以上の無職が対象で、当たったら50万円と冒険グッズ贈呈だって。あんたこの間20歳になったでしょ。ちようどいいから行ってきなさい」

「んなこと言われて行くわけねーだろ」

「いーえ。絶対に行かせるからね。お母さんもう決めたから。もうオーちゃんのご飯は作りません」

「ぐ……」

飯の話をするのは、卑怯だと思う。

「いや、ポケモン、持っていないし」

「近くに博士が住んでるでしょ。頼んでどうにかしてもらいなさい」

「マジかよ……」

嗚呼、アローラを守る太陽と月の獣よ。どうして俺の平穩は守ってくれないのか。いや守ってはくれない。(反語)

「言い忘れてたけど！途中でエーテル財団寄ってきなさいね！宝くじに当たって島巡りに出るならそういう約束だから！」

「……はあ〜い……」

第一目標、ククイ博士の家。

こうして俺の島巡りは、幕を開けたのだった。

研究所に遅刻して御三家を逃した奴が貰うポケモンなんて決まってる

シャイニング
眩しい。

久しぶりのアローラの空は、やっぱり眩しくて原色みたいな青だった。俺がドアを開けると、塀の穴から庭を覗いていた観光客と、庭でくるくる踊っていたピカチュウが逃げていった。

(少し前に空いた穴だが、お袋は『ちよつとした写真スポットになってるみたいだから』と直さない。庭にポケモンが入ってくるのは昔からだ。他人に覗かれるのは正直嫌)

目を細めながら、リリイタウンの方向へ向かう。ククイというポケモン博士は、街ではなく草むらのある道路に研究所を立てているという。面倒なこつた。

「……ん？　　そういえば、ポケモン持っていないのに草むら入って大丈夫だったか？」

この辺にはヤドンとかキャモメしかいないとは聞いたが、若干不安が残る。スプレーでも買えば……いや、今から節約しないでどうすんだ。このまま行こう。

「……こんな調子で島巡りなんて終わるのか……？」

緩やかな風が、一筋吹いていた。

* * *

「初心者向けのポケモンっていうと……ほくのところにいたのはモクロー、ニャビー、アシマリ」

ククイ博士の研究所にたどり着くと、子供が何人か研究所から飛び出していった。その子らと入れ替わりに研究所の扉を開け、上裸に白衣というまともじゃねー格好の博士に事情をなんとか伝えると、博士はハウオリまでついて来いと言った。

そして道中、後ろを歩く俺に向かって、博士はそう話し始めたのだ。

頭の中にイメージが浮かぶ。いわゆる御三家つてやつね。知ってる。

「ただ、申し訳ないんだが、今は1体もいなくてね……ほら、さつき研究所に子供たちがいただろう？ モクローもニャビーもアシマリもその子たちを選んだから」

「なるほど、そうだったんすか……だから、今から捕まえるんですか」

「そういうことだ！ ぼくのイワンコがきみを手伝うから、ハウオリにいるポケモンをゲットしてみてくれ」

「……うっす」

ボールを投げ、ポケモンを捕まえる。

不本意だけどこれから何回もやらなくちゃいけない作業だ。慣れなければ。

「そういえば……さつき研究所にいた子達つて」

「ああ！ 紹介しておいた方がいいな」

沈黙が気まずかったので、思いついた話題を挙げてみる。

「黒い髪の女の子がミツキだ。後ろにいた黒い帽子の男の子が双子のヨウ。白い服の女の子が、ぼくの助手のリーリエ。ハウは昔からリリイに住んでるから顔ぐらいは見たことあるんじゃないか？」

「ああ、確かに見覚えある……かな？」

「ミツキとヨウとハウはこれから島巡りだからね。そのうち会うこともあるだろ……ん、右の草むら」

「右の？ あつ」

草むらが揺れている。何かいるんだ。

「イワンコ、彼を手伝ってくれ」

「オーケー！」

「よ、よろしくお願いしますイワンコさん」

博士のイワンコが、俺と草むらの間に入って戦闘態勢に入った。草むらの中の何かはだんだんこつちに近づいてくる……

黄色い耳がびよこんと飛び出した！ あれは……

「ピチューー！」

ポケモンといえば誰もが知ってる、みんな大好きピカチュウの進化前。こねずみポケモンのピチューだ。

「おお、ピチューか！ 育てば電撃が強力だぞ。きつと良いパートナーになる」

「は、はい」

ライチュウ使いか……いいじゃん！

「わっ！ トレーナーだっ！」

目の前の人間とイワンコに気づいたピチューは、すぐにでんきぶくろに電気を溜め始めた。パチパチと軽い電気の音がする。ここから戦って、ゲットしなくちゃならない。

「イワンコさん！ たいあたり！」

地面を蹴って勢いをつけたたいあたりが、小さな体躯にぶつかる。ピチューはたいあたりを受けて転ぶが、すぐに体から電撃を放った。

「かわして！」

イワンコは飛び退く。が、タイミングが遅い。電撃を喰らってしまう。

「あっ……！」

「少し指示が遅いぞ。攻撃に入る前にそれを予測しておくんだぜ」

電撃ひとつではイワンコは倒れなかった。だが何度も喰らってはいられない。速く攻めないと。でも、攻撃しすぎれば逃げられてしまう。

「たい……あたり……？ いや……もうボールを投げたほうがいいのか……？」

後ろで見ている博士は、何も言ってはくれなかった。

俺がうだうだしているうちに動いたのはピチューだ。イワンコが心配して俺の方を向いたタイミングで、草むらの中に飛び込んでいってしまったのだ。

「ああっ！ 逃げられた……」

「残念だったな。初戦で回避を指示できたのは良かったぜ」

「……その、さつきは何て指示すれば良かったんすか？」

「さつき？ そうだな……あれは攻撃だったな」

「……そつすか……」

「そんなに落ち込むなって！ イワンコを回復させたらまたポケモンを探そう！」

「ウエス」

再び、俺たちは草むらに入っていく。やっぱりピチューが欲しくて、俺は黄色い影を見つけようと目を光らせていた。

何か動いた！ ケーシイ……あつテレポートで逃げた、どうやって捕まえるんだあれ

……

歩き始めて数分、イワンコが足を止めた。

「……何かいるね」

「えっ……ピチューー？」

「わかんない」

奥の方から何か歩いてくる。体は……黄色い！

「よし、先手必勝だ。イワンコさん、かみつく！」

草むらの奥のポケモンにイワンコが飛びかかった。ぎやあと声上がる。

……ん？ ピチューーには声が汚い……しかもデカイ？

「何すんだてめエー！」

「うおわっ!？」

体は黄色く、鼻が長くて目が死んでる。

さいみんポケモン、スリープだった。

「げっ」

「げって……お前俺のこと攻撃しといてなんだよそのムカつく顔は」

「イワンコさん、ここは逃げましょう。スリープがパートナーはちよつと」

「なんだとてめエ！」

「ぎゃあたいあたり！」

飛びかかってきたスリープはイワンコによって阻まれたが、逃げられなさそうだ。

「スリープのさいみんじゆつは強力だ。眠ってしまったえば行動が封じられるからな。気を付けるんだぜ」

「う、うっす」

互いに相手を見据えて動かない。確かエスパーにあくタイプのかみつくは効くはず、かみつくで攻め続けられればイケる！

ゲットはしないけど、倒さないと逃げられないのだ。

「かみつくー！」

イワンコの牙が確実にスリープを捉えた。振り払われたけど、ダメージは入った。このままいけば……

「もう一度かみつく！」

「う…………ぐ…………つ？」

「え？」

何か変だ…………かみつくが出ない？

「かなしばりだ。スリープが覚える技…………かみつくはしばらく使えないぞ」
「なっ!？」

俺が動揺したタイミングでスリープはもう一度仕掛けてきた。振りかぶった手でイワンコをはたき飛ばす。

まずい、向こうのペースに吞まれてる。

「イワンコの技は他にもあるぞ」

「他の技……」

いや、攻撃技は他にはたいあたりしか……

「どうした、そんなモンかつ!？」

スリープが手をかざす。さいみんじゅつだ。多分そうだ。喰らったらマズい。

「……………すなかけ!」

スリープの手から歪んだ念波が繰り出される。

が、念波はイワンコの手前の地面に吸い込まれて消えた。

「外れ……ッ」

「にらみつける! そしてたいあたり!」

防御力を下げてからのたいあたりがスリープにクリーンヒットした。もともと二回もかみつくを受けていたスリープは、これが決定打になって地面に倒れた。

「さあ、ボールを投げるんだ！」

「はっはい！ ……あつヤベ」

しまった、博士に言われるままボールを投げちゃった。いやまあ、向こうもそう簡単にはゲットされないだろ。そう簡単には……

カチツ

「パートナーはスリープだな！」

「よかったね！」

偽りない笑顔で祝ってくれる博士とイワンコだが、当のトレーナーとポケモンは顔が死んでいた。

「ロリコンで……初めてのポケモンがロリコンで……」

「うるせえぞ……それは風評被害でスリープスリーパー一族がみんなロリコンだったのは偏見なんだよ……第一俺は熟女派だ……」

「聞きたくなかったわそんな情報……なんでボールに入ったんだよ……」

「知るかよ……ボール作ってる奴に言えや……」

「まあまあ。偏見は良くないぜ。スリープのさいみんじゅつはとても強力だしね。それに……」

ククイ博士は俺たちを見て明るく笑った。

「きつといいコンビになるさ」

「ええ……」

「ええ……」

「とにかく！ 君たちはパートナー。これから一緒に島巡りをするんだぜ」

「マジかよ最悪」

「被害者は俺だ」

「ま、頑張りなよ！」

限りなく納得がいかなかったが、俺は……俺たちはとうとうハウオリを出ることに
なった。

島巡りをする上で重要なのは四つの島に点在する試練、そして島の長であるしまキン
グとの大試練だ。全ての試練を超えることで島巡りは達成される。

この近くにあるらしいノーマルタイプの試練が、俺たちにとって最初の試練になる。

「ところで……」

「ん？ なんすか？」

「まだ君の名前を聞いてなかったな。なんて呼べばいいんだ？」

「俺の名前……オ……いや」

それを教えるのは、気まずかった。

「ヒキニートつす。ヒツキーって呼んでください」

「ヒツキーか。よろしく、頑張れよ」

「なんだその名前……」

「じゃ、行くぞスリープ」

「はあ……嫌な予感しかしねーぞ……」

次は、2番道路だ。